様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：６４３０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００３４

研究課題名（和文）1940-50年代の日本における民衆芸術運動に関する比較文化史的研究

研究課題名（英文）Comparative Study on the Cultural History of the Popular Art Movement in 1940/50s Japan

研究代表者
坪井　秀人（Tsuboi, Hideto）

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：９０１９７７５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：戦中戦後の日本国内におけるサークル運動研究に関する総括を行うとともに、在外日本人たちが主体となって展開された外地における民衆芸術運動の実態について調査と分析を行い、両者がどのように関連づけられるかについて考察を進めた。外地の運動については、戦時下米国の強制収容所で刊行されていた『ハートマウンテン文芸』等の雑誌、1950年代初頭に中国東北部地方の炭砿地域で刊行されていた雑誌『ツルオカ』を発掘調査することによって調査を進めた。以上の調査分析によって、戦中戦後をまたぐ民衆芸術運動の歴史的再定位を行うことが出来た。

研究成果の概要（英文）：While integrating my research about the circle movements in the wartime and postwar Japan, I investigated about the activitiies of the popular art movements in overseas territories of Japan and the Internment Camps in the US and analyzed how both movements could be related each other. Regarding the latter movements, I made inverstigations a journal Heart Mountain Bungei published by the Japanese American people at the Heart Mountain Relocation Center and another journal Tsuruoka published by the Japanese internees in the coal pit area of the district in northeastern China. By these investigations, the popular art movements crossing between the war-time and the after-war period can be repalced and estimated historically.

研究分野：日本近代文学・文化史

キーワード：民衆芸術運動　サークル運動　日系移民　強制収容所　留用

１．研究開始当初の背景

（1）本研究の研究代表者は戦時期から戦後のサークル運動の文芸活動について研究を続けてきた（坪井秀人『声の祝祭』、名古屋大学出版会、1997、『現代思想』臨増特集「戦後民衆精神史」2007・10 掲載の坪井「初期サークル詩運動の評価に向けて」など）。

（2）サークル運動については鳥羽耕史（早稲田大学）や道場親信（和光大学、故人）らと名古屋・岐阜のサークル誌の調査を継続してきた。本研究は以上の研究実績を発展させ、戦中戦後の民衆芸術運動について総合的に考察したものである。

２．研究の目的

（1）本研究は、1940-50 年代日本の芸術諸分野において、専門作家（職業作家）以外の民衆がどのように創作や上演・批評等の芸術運動に参加したのかを検証するとともに、敗戦を跨いで戦時期から戦後にかけての時期に民衆の芸術参加の様態や意識においてどのように連続性と不連続性が成り立つのかを考察することを目的とする。

（2）さらに、この時期に固有の民衆芸術運動の性格を明らかにするため、国内外の研究者の協力も得て、比較文化史的な視角から調査研究を行う。

３．研究の方法

（1）文献資料調査で、戦時期の資料や、詩歌等の文学や芸術活動に関わる資料、および戦後 1950 年代までのサークル誌ほかサークル運動の資料、労働組合の文化部等による種々の資料を多様なジャンルに渡って調査収集し、1940-50 年代の民衆芸術運動の全体像を明らかにする。必要に応じて関係者への聞き取り調査も行う。比較研究のために東アジア・ヨーロッパ・アメリカ等において調査を行う。

（2）比較研究を海外の研究者との共同研究として発展させるために、国内外でワークショップを企画参加し、当該主題についての議論を深め、資料や情報の共有を図る。

４．研究成果

（1）戦後のサークル運動研究については、長年行ってきた調査研究を総括する作業を行い、その報告を 2015 年 11 月 1 日に、名古屋大学で開催された第 9 回戦後文化運動合同研究会にて行った。その報告は宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編『「サークルの時代」を読む　戦後文化運動研究への招待』（影書房、2016）に掲載された。

（2）アジア太平洋戦争勃発後のアメリカ合州国における日系移民の強制収容所（Internment Camp）における文学表現を収容所内で発行されていた日本語雑誌と英字新聞を分析して考察した。特にハートマウンテン収容所で刊行されていた『ハートマウンテン文芸』とトゥリーレイク収容所で刊行されていた『鉄柵』の詩歌を分析し、両者の比較を行った。その成果の一部は 2015 年 6 月 5 日にカリフォルニア大学ロサンゼルス校で開催された UCLA Trans-Pacific Workshop で報告し、さらに同年 11 月 12 日にベルリン自由大学で開催されたワークショップ ”Exploring Space in Japanese Literature”でも報告、ベルリンでの英語の報告は日本語論文にして「柵の中で」と題して雑誌『JunCture』第 7 号（2016．3）に発表した。また、雑誌『現代詩手帖』に連載した「二十世紀日本語詩を思い出す」の中でも合州国移民詩の分析を行い、この調査の成果を公にしている。

（3）旧満洲の留用日本人の文芸文化運動、特に黒竜江省の炭坑町鶴崗での活動についての調査を行い、北京にて二度関係者に聞取り調査を行ったほか、鶴崗の現地調査を行い、関連施設およびその跡地を調査した。同地で刊行されていた雑誌『ツルオカ』については、現在その復刻版を刊行する準備に入っている。またこの調査研究の中間報告としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校で開催された UCLA Trans-Pacific Workshop で報告し、ペーパーとしてまとめた。このペーパーと上記聞取り調査の結果は前掲の復刻版の解説書に組み込まれる予定である。またこの主題に関しては大阪大学、神戸大学の専門研究者と研究会を行って、知識と情報の共有を図った。

（4）本研究を継続していた 2015 年は戦後 70 年にあたり、〈戦後〉という時代は大きな節目を迎えたが、〈戦後〉という時代区分はアジアや世界に対して閉じた自己認識のもとに形成されてきた。そのため〈戦後〉という枠組みでこの 70 年の歴史を捉えることは再検討が必要と考え、勤務先の国際日本文研究センターで共同研究会「戦後日本文化再考」の研究班を立ち上げた。文学・歴史・美術史・映画・医療などの多様な分野の研究者が集まって行う本プロジェクトは、〈戦後〉概念を根本的に問い直し、経験世代の消滅を控えて危機的状況にある戦争の記憶に関わる諸問題に取り組むことを通して、この大きな問いに対して応答することを目的として本研究の基底的な問題についての議論を重ねた。

（5）研究代表者が編集長を務めている国際日本文化研究センターのジャーナルである『日本研究』において本研究の主題に通底する企画として二度の特集号を組んだ。一つは「〈失われた 20 年〉と日本研究の未来」と題

したもので、一般にバブル崩壊以後、1990年代以後20年の、日本経済が悪化した時代である〈失われた20年〉を日本の戦後半世紀の時間の液状化していく過程と捉え、日本の戦後社会の様々な領域の問題に関わるものとして議論を通して行った。もう一つの特集は「日本研究の過去・現在・未来」というもので、1980年代以後の日本研究を多方面の分野から再検討する企画を立てて、戦後の民衆芸術運動の位置づけを現代の社会からどのように考えたらよいかについて、その企画構成と序文執筆の中で考察を加えた。またベルリンの壁崩壊25周年を記念してソウルのゲーテ・インスティチュートで開かれた国際シンポジウムに参加して、1989年および1995年が戦後における転換点であったことを分析・報告し、それが民衆芸術運動の担い手たちの意識にどのような変容をもたらしかたについても考察した。

（6）EAJSやAASなどの国際学会ではパネル報告を行い、日本の戦後の近代作家の諸問題を取り上げた。具体的には敗戦時における戦争経験との向き合い方、復員者における移動の意識の問題、バブル崩壊期以降の食文化の問題など多様な問題について考察するものだったが、これらも敗戦期の市民意識や民衆文化（ポピュラーカルチュア）に関わる諸問題の研究としても位置づけられる。

（7）ドイツで刊行された論文集*Wort-Bild-Assimilationen*にドイツ語で執筆した論考は、1920年代以降における日本の短詩型文学、とりわけ和歌がどのようにドイツ語圏および東欧圏で翻訳受容され、かつまたそれらが作曲を経てどのように人々に歌われるようになったのかについて調査考察した試論的研究だが、これはジャポニスムがヨーロッパにおいてどのように民衆文化（上位文化および下位文化）において波及していったのかを考察したものであり、本研究の一つの成果として捉えられるものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計25件）

①～㉒

坪井秀人、二十世紀日本語詩を思い出す（連載①～㉒）、現代詩手帖（思潮社）、査読無、第58巻4号-第60巻3号、2015年－2017年、①58-4, pp.108-116、②58-5, pp.152-163、③58-6, pp.147-155、④58-7, pp.188-197、⑤58-8, pp.182-189、⑥58-9, pp.136-144、⑦58-10, pp. 148-157、⑧58-11, pp.138-147、⑨59-1, pp.138-144、⑩59-2, pp.136-142、⑪59-3, pp.136-143、⑫59-4, pp.132-138、⑬59-5, pp.148-156、⑭59-6, pp.150-157、⑮59-7, pp.182-189、⑯59-8, pp.194-203、⑰59-9, pp.150-157、⑱59-10, pp.130-139、⑲59-11, pp.160-168、⑳60-1, pp.104-112、㉑60-2, pp.138-147、㉒60-3, pp.136-146

㉓ 坪井秀人、柵の中で――日系人強制収容所の中の書記空間、JunCture、査読有、第5号、2016年、pp.76-86

㉔ 坪井秀人、戦中戦後の跨ぎ方――〈国文学〉教育＝研究の場合――、文学（岩波書店・隔月刊）、査読無、第15巻第5号、2014年、pp.67-84

㉕ 坪井秀人、三好達治と戦争、昭和文学研究、査読有、第69集、2014年、pp.24-35

〔学会発表〕（計13件）

① 坪井秀人、戦後空間のなかの〈変態〉、日本文学協会ラウンドテーブル、2016.11.6、二松学舎大学（東京都）

② 坪井秀人、旧満洲留用者たちの戦後雑誌『ツルオカ』とその周辺、韓国日本学会、2016.8.26 嘉泉大学校（韓国、ソウル）

③ 坪井秀人、象徴主義再考、高麗大学校講演会、2016.8.24、高麗大学校（韓国、ソウル）

④ 坪井秀人、Surviving in the soil: the "postwar" of Japanese laborers detained in Manchuria and one of their magazine "Tsuruoka"、Trans-Pacific Workshop、2016.6.6、UCLA（アメリカ、ロサンゼルス）

⑤ 坪井秀人、夏目漱石文学と観相学、漱石没後百年記念国際シンポジウム、2016.4.30、台湾大学（台湾、台北）

⑥ 坪井秀人、Tracing the Dembilized: The Requiem Novls of Yagi Yoshinori、アジア学会（AAS）、2016.4.1、シアトル・コンベンションセンター（アメリカ、シアトル）

⑦ 坪井秀人、Inside the Fence: Writing in the Japanese-American Internment Camps、Workshop ”Exploring Space in Japanese Literature”、2015.11.12、ベルリン自由大学（ドイツ、ベルリン）

⑧ 坪井秀人、〈転住所〉のなかで書くこと：サークル運動史の中の戦時日系人収容所内雑誌、Trans-Pacific Workshop、2015.6.6、UCLA（アメリカ、ロサンゼルス）

⑨ 坪井秀人、学問批判と〈終焉〉のディスクール、東・西洋日本（語）文学研究国際学術シンポジウム、2015.5.15、高麗大学校（韓国、ソウル）

⑩ 坪井秀人、The 1995 Turning Point: Debates over Historical Perceptions in Post-Cold War Japan、Symposium ”Reading 1989 Globally: On the interconnectivitiy between Asia and the Fall of the Berlin Wall”、2014.11.7、Goethe Institute, Korea（韓国、ソウル）

⑪ 坪井秀人、和歌をうたう―モダニズムとジャポニスムをむすぶ和歌歌曲―、国際

日本文化研究センター学術講演会、2014.9.25、（日本、京都）

⑫ 坪井秀人、Representation of the Post-Bubble “Abject” in Kirino Natsuo’s *Out*、ヨーロッパ日本学会（EAJS）、2014.8.30、リュブリャナ大学（スロヴェニア、リュブリャナ）

⑬ 坪井秀人、日本文化の現在的価値？――少女文化論から考える、韓国日本学会、2014.8.22、誠信女子大学校（韓国、ソウル）

〔図書〕（計 6 件）

① 宇野田尚哉、川口隆行、坂口博、鳥羽耕史、中谷いずみ、道場親信、坪井秀人ほか、影書房、「サークルの時代」を読む：戦後文化運動研究への招待、2016、366

② 五味渕典嗣、日高佳紀、坪井秀人、千葉俊二ほか、翰林書房、谷崎潤一郎読本、2016、355

③ 竹内瑞穂、坪井秀人、橋本明ほか 13 名、六花出版、〈変態〉二十面相　もう一つの近代日本精神史、2016、215

④ 坪井秀人、宗像和重、臨川書店、山田美妙全集第八巻「韻文・戯曲」、2016、477

⑤ *Wort-Bild-Assimilationen: Japan und die Moderne*, Simone Müller, Itô Tôru, Robin Rehm [Hrsg.], Hideto Tsuboi ほか Berlin:Gebr. Mann Verlag, 2016. 224

⑥ 芥川龍之介ハンドブック、庄司達也編、坪井秀人ほか、2015、鼎書房、207

６．研究組織

(1)研究代表者

坪井秀人（TSUBOI, Hideto）

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：90197757